

**見ぬ世の友
―読書のすすめ:戯曲を読む**

植 木 朝 子

奨励者紹介〔うえき・ともし〕

同志社大学長

同志社大学文学部教授

〔研究テーマ〕日本中世における歌謡および芸能の研究

心に湧き出る美しい言葉

わたしの作る詩を、王の前で歌おう。

わたしの舌を速やかに物書く人の筆として。

（詩編 45 編2節）

只今ご紹介いただきました植木です。

本日は「見ぬ世の友―読書のすすめ:戯曲を読む」というテーマでお話いたします。

見ぬ世の友

まず、表題の「見ぬ世の友」ですが、これは兼好法師の随筆『徒然草』の一節からとっています。『徒然草』13段に「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」という一文があります。「一人、灯のもとで書物を広げて、会うことのかなわぬ昔の人を友とすることは、とても心慰められることである」という意味です。ここで、兼好は、古典を読むことを推奨しているわけです。古典に限らず、書物を読むということは、他者の経験や感情や考え方にふれるということです。私たちはもちろん、日々のさまざまな人との関わりを通して、他者の考え方にふれることはできますが、現実世界での人間関係の範囲は限定的です。しかし、書物を通して、私たちは人間関係を無限に広げ、現実には体験できないさまざまな経験をすることができます。

読書のすすめ

この3月に、本学も加盟している日本私立大学連盟の第16回学生生活実態調査の集計報告書が出されました。その中に「あなたは、1か月に何冊くらいの本（電子書籍を含む。雑誌、漫画は除く）を読みますか。」という質問項目があります。選択肢は、

- 1 ほぼ読まない
- 2 1～2冊
- 3 3～4冊
- 4 5～6冊
- 5 7冊以上

の五つです。皆様はいかがでしょうか。報告書によれば、所属学部や学年によって差はありますが、全体の平均は、「ほぼ読まない」が48・9%、「1～2冊」が35・8%、「3～4冊」が9・7%、「5～6冊」が2・9%、「7冊以上」が2・8%です。ほぼ読まないという方が、全体の約半分ということになっています。

情報社会といわれる現代において、私たちはネット上で多くの情報を得ることができますが、しばしば指摘されるように、ネット上では極端な意見、過激な考え方が支持を得やすい傾向があり、また、検索履歴から同じような意見ばかりが自分のもとに集まってきて、それを受動的に享受するようになりがちです。書物も、もちろん、読もうとする人が自分の好みによって選択するわけですが、本を選ぶ、という行為そのものが、客観的な目、主体性に導かれている側面があるように思います。

戯曲のおもしろさ

今日は、書物のさまざまなジャンルの中でも、特に「戯曲を読む」という副題を掲げました。「戯曲」という形式は、少し読みづらいところがあるかもしれませんが、なぜ戯曲かというと、そこには、さまざまな立場、考え方の登場人物がおり、読者としては、セリフとして発せられた言葉から多様なものの見方、考え方を受け取り、さまざまな人生を経験することができる、という利点があるからです。もちろん小説を読むことでも、私たちは自分が現実には体験しえない人生を経験することができますが、視点人物がある程度固定される小説に対して、戯曲は、より多くの人々の多様な考え方、生き方を同時並行的に味わうことができます。

シェークスピアやチェーホフなど、西洋の古典的戯曲に読むべきものはたくさんありますし、日本にも、能や文楽、歌舞伎など、充実した古典戯曲があります。明治以降の作家として、私は特に、泉鏡花や久保田万太郎、森本薫、三島由紀夫などの戯曲が好きで、彼らの作品は今でもしばしば上演されるので、機会があれば観ていますが、今日はさらに新しいところで、2人の劇作家とその作品の一例をご紹介します。

平田オリザ科学シリーズ

皆様は平田オリザという劇作家をご存知でしょうか。1962年生まれで現在59歳、劇団「青年団」を主宰しています。岸田國士戯曲賞、読売演劇大賞優秀演出家賞、同優秀作品賞など多くの賞も受賞しており、大学教育にも携わっています。平田氏の作品に科学シリーズと呼ばれる作品があります。1990年代に作られたもので、『カガクするココロ』『北限の猿』『バルカン動物園』の3作です。これらは、遺伝子操作で新しい人類を誕生させようとする最先端の生物学実験室を舞台としています。

ボノボという、チンパンジーによく似た大型類人猿を人工的に進化させ、人間を作ることは可能かという課題のもとに、農学、生物学、心理学、生化学、言語学、霊長類研究などさまざまな学問分野の若手研究者たちが集まってきています。彼らの間でやりとりされるセリフから、さまざまな問題が浮かび上がってきます。初演から30年近く経っているとは思えない、実に今日的な問題です。

登場人物たちは、それぞれ恋愛やキャリアや家族などに関して個人的な悩みを抱えています。研究面においても、複雑な問題が提示されます。ある研究者は、猿の脳を人為的に傷つけ、自閉症に近い状態を作って実験を繰り返しています。それを、霊長類研究所所属の研究者は倫理的に許されないと激しく

非難します。でも実は、前者の研究者はシングルマザーとして育てている息子が自閉症であり、息子を治そうと必死で実験を繰り返して、それを知っている研究者仲間は、一概に責めることはできないのではないかと思います。また、農学部から来ている研究者は、地球上から飢餓をなくすため、ひたすら大きな野菜や果物を作ることに没頭していますが、植物を動物より低く見るこの研究室の雰囲気にはなじめないと不満を言います。植物だって、ただ動けないだけで、動物と同じくらい優れているのだ、と。するとさかさず、研究倫理に引っ掛かることもなく、遺伝子操作を繰り返して、カボチャみたいに大きいトマトを作っている君は、植物を大事にしていると言えるのか、と反論されます。人類の幸福を追求するために、他の生物を犠牲にすることはどこまでなら許されるのか、という問題に対し、登場人物の中には、猿はちょっと…と言い、ネズミを何万匹も殺しておきながら、よく言うど揶揄される研究者もいます。社会生物学を専攻している研究者は、ラットなどの実験動物はどんどん使ってどんどん実験した方がいい、そのために作られているのだからと断言しますが、皆様はどう感じられるでしょうか。

科学シリーズの完結編である『バルカン動物園』では脳死の問題も取り上げられ、劇中には「脳のもっともすぐれた能力は神を信じること、もっとも美しい能力は神に祈ること」といったセリフも出てきて、科学と宗教の関係性について考えさせられます。このように、人間と人間以外を分けるのは何なのか、心とは何か、機械に人格を認めるのかどうか、人間の幸せのために他の生き物を犠牲にすることはどこまでならば許されるのか、研究に私情をはさむことの是非など、難しい問題が提示されますが、平田氏の群像劇には多くの視点があるため、読者はそれぞれがそれぞれの言い分をもっていることを知り、多様性への理解を深めることになります。

松本和子『眠れるチエ』

もう一人ご紹介したいのは、松本和子という劇作家です。この方は、一般にはあまり知られていませんが、高校演劇の世界では著名な人で、ご自身のつとめる女子校の演劇部のために書いた作品が『青春の神話―光りと影の少女たち』（青雲書房 1991年）という題の戯曲集としてまとめられています。

実は、私は、高校時代、演劇部に所属していて、この戯曲集に収められている『眠れるチエ』という作品を上演したことがあります。この作品には登場人物は3人しか出てきません。表題の『眠れるチエ』とは、交通事故にあっていわゆる植物状態になっている小学3年生のことです。登場人物はそのチエの母、つまり被害者と、チエを車で轢いてしまった加害者の女性、そして看護師です。膨大なセリフによって、被害者、加害者双方の生活や心情が浮かび上がります。私は被害者の役を演じました。当然ながら被害者は加害者を恨み、憎みますが、その加害者が誠実な人であるために、怒りのやり場がなくなり、逆に不誠実な人だったらよかったのにと感じて、加害者の誠実さを強く責めることさえあります。戯曲の読み手は、どちらか一方の側に肩入れするということは簡単にはできません。同様に、この戯曲集におさめられた作品の中には、腎臓を患った教え子に自分の腎臓をあげた教員とその腎臓移植によって命を救われた生徒との間の葛藤、生徒と我が子のどちらを優先するかという教員の苦悩と周囲の感情、遺産をめぐる家族間の争い、生徒指導をめぐる教員間の意見の対立など、さまざまな考え方があって、その良し悪しを簡単には決められない問題が多く出てきます。答えは最後までわからないかもしれません。しかし、登場人物それぞれの立場になって考え、思い悩むという経験は、とても大事なことで私は思います。

ちなみに、私の高校時代の『眠れるチエ』上演には後日譚があります。大学院に進学してから、私は十文字学園女子中学校・高等学校というところで、非常勤講師として、国語を教えることになりました。その国語科で一緒になったのが、なんと、『眠れるチエ』の脚本を書かれた松本和子先生でした。松本先生は、十文字の演劇部のために、登場人物の数が少なく、女性だけでできる芝居を書いておられたのです。偶然の、しかし、うれしい出会いでした。

多様性への理解

さて、昨今の感染症や戦争は、これまでの社会に潜んでいた分断を顕在化させました。そして、自分こそが絶対的正義だと思い込むことの危険性を、私たちは思い知らされました。そういう今だからこそ、多様な人々の多様な境遇、背景、考え方を知るべきであり、戯曲を読むことは一もちろん、その上演舞台を観ることも—その一つの手助けになり得るものと思い、お話しさせていただいた次第です。

ご清聴ありがとうございました。

2022年4月19日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録